

【曲目解説】

*序曲、スケルツォと終曲（シューマン）

シューマンの管弦楽曲における管弦楽法（オーケストレーション＝管弦楽曲に編曲すること）は、その独特な手法ゆえ、あまり評価されていないのが実態です。その要因は、彼の曲では、同じ旋律を複数の楽器が演奏する、つまり楽器が重なっていることが多く、常に多くの楽器が鳴っていて暑苦しい印象を与えることにありと想われます。しかし、楽器を重ねることをもって管弦楽法が下手だというのは、独り合点であり、いささか研究不足だと思うのです。楽器を重ねて分厚くするのは、彼の色であり、特徴と考えるべきです。よくよくスコアを見ると、特に内声に独特の工夫が凝らされていることが分かります。例えば、内声の代表格＝ヴィオラの書き方を見てみると、それは顕著に表れています。ベートーフェンの曲では、ヴィオラはいわゆる「刻み」が多いのですが、多くの場合、同じ音を長く刻んでいて、それは単に和音を構成しているに過ぎません。それに対しシューマンの曲では、刻みながらあたかも裏でメロディを奏でているように音が変化していきます。これだけを見ても、彼の管弦楽法がベートーフェンよりも劣るとは言えないと、私は声を大にして言いたいのです。実は、彼の交響曲を手本にして交響曲を書いた作曲家は、ブラームスを始めチャイコフスキーやボロディンなど数多くいるのです。それだけ後の作曲家に尊敬され影響を与えていたという事実を忘れてはいけないと思うのです。

この曲が作曲されたのは1841年ですが、この年の2月には交響曲第1番「春」が完成されており、この曲はその直後に書かれています。曲名のとおり、序曲、スケルツォ、終曲の3つの楽章から構成され、これに緩徐楽章を加えれば交響曲の構成となります。当初は交響曲第2番として構想されていたようですが、交響曲としては規模が小さく、発展性に乏しいため、この曲を交響曲として世に出すことを躊躇ったのだと思われる。また、同年9月には、交響曲第4番の初稿（現在演奏されている改訂版とはかなり違います。）が完成していますが、こちらが交響曲第2番として12月に初演されています。

なお、この時期の管弦楽曲には、既にシューマン独特の響きがありますが、楽器を重ねる手法はあまり見られず、いわゆる「シューマンらしさ」は、まだ影を潜めています。

序曲：暗く短い序奏と春を思わせる快活な主部から構成されています。

スケルツォ：主部は、「ターン・タ・タン」というベートーフェンの交響曲第7番を思わせるリズムが終始支配しています。歌曲を思わせる短いトリオが2回出てくるところは、他の交響曲にも見られます。

終曲：非常に速い曲の裏でヴィオラが三連符で動き続けています。ヴィオラ奏者にとっては苦難を強いられる曲ですが、ここに他の作曲家には見られない「シューマンらしさ」が表れています。（鷹）

*ヴァイオリン協奏曲第4番（モーツァルト）

モーツァルトはピアノの演奏家として有名ですが、父レオポルドが優れたヴァイオリン奏者であったことからその教えを受け、13歳のときには無給ながらザルツブルグ宮廷楽団のコンツェルトマイスターに任じられています。モーツァルトが使った小型ヴァイオリンは現在でもザルツブルグのモーツァルト博物館に保存されているそうです。

ヴァイオリン協奏曲は第1番から第7番までが知られていますが、6番と7番は現在では本人作とは認められていません。第1番から第5番の5曲はすべて1775年（19歳）に作曲されています。ザルツブルグ宮廷楽団に所属していた優れたヴァイオリン奏者アントニオ・ブルネッティのために書かれたものと考えられています。（もちろんモーツァルト自身のためでもあったでしょう。）

第4番は1775年10月に作曲されていますが他の協奏曲に比べ自由な形式で書かれています。

【第1楽章】 アレグロ 4/4 拍子

軍隊的な冒頭の主題は独奏ヴァイオリンによって繰り返し奏されますが、展開部、再現部にも姿を表しません。冒頭の主題からこの協奏曲は「軍隊的」と呼ばれることがあります。

【第2楽章】 アンダンテ・カンタービレ 3/4 拍子

独奏ヴァイオリンの美しいメロディが一貫して続きます。

【第3楽章】 ロンド アンダンテ・グラチオーソ 2/4 拍子

非常に自由な形で作られ、ロンドとソナタ楽章が混然一体となっているような構成です。

(V a @ V S)

